

盂蘭盆会

この記事には**複数の問題があります**。[改善](#)や[ノートページ](#)での議論にご協力ください。



- **出典**がまったく示されていないか不十分です。内容に関する [文献](#)や[情報源](#)が必要です。（2013年8月）
- **独自研究**が含まれているおそれがあります。（2013年8月）
- **日本と中国** 中心に書かれており、**世界的観点** からの説明がされていないおそれがあります。（2013年8月）

盂蘭盆会（うらぼんえ）とは、7月15日を中心に7月13日から16日の4日間に行われる仏教行事のこと^{[1][2]}。日本における日付については、元々旧暦7月15日を中心に行われていたが、改暦にともない新暦（グレゴリオ暦）の日付に合わせて行ったり、一月遅れの新暦8月15日や旧暦のまま行っている場合に分かれている。父母や祖霊を供養したり、亡き人を偲び仏法に遇う縁とする行事^[3]のこと。『**盂蘭盆経**』（西晋、竺法護訳）、『**報恩奉盆経**』（東晋、失訳）などに説かれる目連尊者の**餓鬼道**に堕ちた亡母への供養の伝説に由来する。**盂蘭盆**（うらぼん）、**お盆**とも。なお、旧暦7月15日は、**仏教**では安居が開ける日である「**解夏**」にあたり、**道教**では**三元の中元**にあたる。



盂蘭盆会の儀式の様子（台湾）

目次

語義

中国での盆会
目連伝説

日本での盆会

脚注

参考文献

関連項目

外部リンク



盂蘭盆会（香港）

語義

盂蘭盆は、**サンスクリット語**の「**ウランバナ**」（ullambana、उल्लम्बन्）の音写語で、古くは「**烏藍婆拏**」（『**玄応音義**』）、「**烏藍婆那**」と音写された^{[4][5]}。「ウランバナ」は「**ウド**、**ランプ**」（ud-lamb）の意味があると言われ、これは倒懸（さかさにかかる、逆さ吊り）という意味である。

近年、古代イランの言葉（アヴェスター語）で「靈魂」を意味する「ウルヴァン」（urvan）が語源だとする説が出ている^[5]。サンスクリットという言葉がアヴェスター語と同じく印欧語族のインド・イラン語派に属するという事から考えると、可能性は比較的高い。古代イランでは、祖先のフラワシ（Fravaši、ゾロアスター教における精霊・下級神。この世の森羅万象に宿り、あらゆる自然現象を起こす靈的存在。この「フラワシ」は人間にも宿っており、人間に宿る魂のうち、最も神聖な部分が「フラワシ」なのだと言う。説ではこのフラワシ信仰が祖霊信仰と習合し、「祖霊」を迎え入れて祀る宗教行事となったとする。

中国での盆会

目連伝説

本来的には安居の終わった日に人々が衆僧に飲食などの供養をした行事が転じて、祖先の霊を供養し、さらに餓鬼に施す行法（施餓鬼）となっていき、それに、儒教の孝の倫理の影響を受けて成立した、目連尊者の亡母の救いのための衆僧供養という伝説が付加されたのである^[4]。

仏教における『盂蘭盆経』に説いているのは次のような話である。

安居の最中、神通第一の目連尊者が亡くなった母親の姿を探すと、餓鬼道に堕ちているのを見つけた。喉を枯らし飢えていたので、水や食べ物を差し出したが、ことごとく口に入る直前に炎となって、母親の口には入らなかった。哀れに思って、釈尊に実情を話して方法を問うと、「安居の最後の日にすべての比丘に食べ物を施せば、母親にもその施しの一端が口に入るだろう」と答えた。その通りに実行して、比丘のすべてに布施を行い、比丘たちは飲んだり食べたり踊ったり大喜びをした。すると、その喜びが餓鬼道に堕ちている者たちにも伝わり、母親の口にも入った。

咸亨5年（1269年）に南宋の志磐が編纂した『仏祖統紀』では、梁の武帝の大同4年（538年）に帝自ら同泰寺で盂蘭盆齋を設けたことが伝えられている。『仏祖統紀』は南宋代の書物なので梁の武帝の時代とは、約700年の隔たりがあり、一次資料とは認め難い。しかし、梁の武帝と同時代の宗懐が撰した『荊楚歲時記』には、7月15日の条に、僧侶および俗人たちが「盆」を営んで法要を行なうことを記し、『盂蘭盆経』の経文を引用していることから、すでに梁の時代には、偽経の『盂蘭盆経』が既に成立し、仏寺内では盂蘭盆会が行なわれていたことが確かめられるのである。

南宋代になって、北宋の都である開封の繁栄したさまを記した『東京夢華録』にも、中元節に賑わう様が描写されているが、そこでは、「尊勝経」・「目連経」の印本が売られ、「目連救母」の劇が上演され好評を博すほか、一般庶民が郊外の墓に墓参に繰り出し、法要を行なうさまも描かれている。

日本での盆会

日本では、この「盂蘭盆会」を「盆会」「お盆」「精霊会」（しょうりょうえ）「魂祭」（たままつり）「歓喜会」などとよんで、今日も広く行なわれている。この時に祖霊に供物を捧げる習俗が、いわゆる現代に伝わる「お中元」である。

古くは推古天皇14年（606年）4月に、毎年4月8日と7月15日に齋を設けるとあるが、これが盂蘭盆会を指すものかは確認がない^[6]。

齐明天皇3年（657年）には、須弥山の像を飛鳥寺の西につくって盂蘭盆会を設けたと記され、同5年7月15日（659年8月8日）には京内諸寺で『盂蘭盆経』を講じ七世の父母を報謝させたと記録されている^[7]。後に聖武天皇の天平5年（733年）7月には、大膳職に盂蘭盆供養させ、それ以後は宮中の恒例の仏事となって毎年7月14日に開催し、盂蘭盆供養、盂蘭盆供とよんだ。

奈良、平安時代には毎年7月15日に公事として行なわれ、鎌倉時代からは「施餓鬼会」（せがきえ）をあわせ行なった。また、明治5年（1872年）7月に京都府は盂蘭盆会の習俗いっさいを風紀上よくないと停止を命じたこともあった。

現在でも長崎市の崇福寺などでは中国式の盂蘭盆行事である「（普度）蘭盆勝会」が行われる。

主として現代日本における風習についてはお盆もあわせて参照のこと。

脚注

- ↑ コトバンク「盂蘭盆会」 (https://kotobank.jp/word/%E7%9B%82%E8%98%AD%E7%9B%86%E4%BC%9A-441915)
- ↑ コトバンク「盂蘭盆」 (https://kotobank.jp/word/%E7%9B%82%E8%98%AD%E7%9B%86-35347)
- ↑ 浄土真宗では、先祖供養の概念が無く、盂蘭盆会は亡き人を偲び仏法に遇う縁とする行事である。参考文献：『お内仏のお給仕と心得』P.69 - 73、『真宗の仏事-お内仏のある生活-』 P.121 - 123)
- ↑ *a**b* 「年中行事事典」p97 昭和33年（1958年）5月23日初版発行 西角井正慶編 東京堂出版
- ↑ *a**b* 『岩波 仏教辞典』p62 1989年 12月5日第一刷発行 中村元ら編 岩波書店
- ↑ 「斎」は物忌の意であり、釈迦の生誕日とは関係がない。なお、4月8日は父・欽明天皇の崩御日に近い。
- ↑ 後年の齊明天皇は主に道教を奉じており、この祖霊参拝は中元であった可能性がある。（天武天皇#道教）

参考文献

- 菊池祐恭 監修 『お内仏のお給仕と心得』 真宗大谷派宗務所出版部、1981年、改訂、69頁。ISBN 4-8341-0067-7。
- 真宗大谷派宗務所出版部編 『真宗の仏事-お内仏のある生活-』 真宗大谷派宗務所出版部、2013年11月、121頁。ISBN 978-4-8341-0475-2。

関連項目

- 回向
- 施餓鬼
- お盆
- 盂蘭盆経
- 盆踊り
- 地藏盆
- 御招霊

外部リンク

- 「盂蘭盆」考A Study of Yu-lan-pe 高松大学紀要33 1-11

「https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=盂蘭盆会&oldid=65081498」から取得

最終更新 2017年8月11日 (金) 01:48（日時は個人設定で未設定ならばUTC）。

テキストはクリエイティブ・コモンズ表示-継承ライセンスの下で利用可能です。追加の条件が適用される場合があります。詳細は利用規約を参照してください。

目連のお母さんのこと

母のことを書いてみようと思う。それは遙か二五〇〇年以上も昔の、目連という男とその母、そして釈尊との話である。

その前に触れてみたい唄がある。歌手の中島みゆきさんの「帰省」という唄だ。

帰省

遠い国の客には笑われるけれど
押し合わなけりゃ街は 電車にも乗れない
まるで人のすべてが敵というように
肩を張り肘を張り 押しのけ合ってゆく
けれど年に二回 八月と一月
人ははにかんで道を譲る故郷（ふるさと）からの帰り
束の間 人を信じたら
もう半年がんばれる
《アルバム『短編集』所収》

八月と一月、つまり盆と正月に故郷に帰ると人は優しさを快復する。私は、八月の盆にまつわる物語をたずねながら、人が優しさを取り戻すわけを考えてみたい。

目連。釈尊の弟子にして、その教団の中心人物であった彼は、遙か遠くを見通せる天眼を備えるなどの超人的な能力によって神通第一と称えられる男であった。また釈迦教団を快く思わない他宗のものと積極的に議論をしてはやり込め、時には過激な対応も辞さなかったという。そのため目連は他宗の暴徒から再三に渡るテロに会い、その都度神通力によって危機を乗り越えたというが、何度目かの襲撃に遇った時には、自身の業の報いであると受け入れて、師である釈尊に先んじて死んでいったという。親友であった舍利弗とともに初期の仏教教団の基礎を築いた人物である。

この目連が、修行を通じてついに神通力を得た時のことである。その力で彼が最初にしたのは、今は亡き母のあの世の様子を見通すことであった。

ところが、である。恐らく彼はわが天眼を疑ったことであろう。あの世まで見通す力を得た目連の眼が初めてとらえたのは、餓鬼の世界に堕ちて苦しむ母の姿であったのだ。

目連を産み、慈しみ、育てた母は、その我が子への愛が妄執となって慳貪の罪を犯したのである。ある日、出家した我が子が、他の修行僧たちとともに托鉢のために村に来た。

その時、目連の母は、他の僧の鉢には何も施さず、我が子目連の鉢にのみ、たくさんの食を盛ったという。それは、母の愛としては自然なことであったかもしれないが、出家者に対する施与の行いとしては、気の毒なことだが誤りであった。何故なら托鉢の乞食行は、修行者にとっての徳行となるばかりでなく、実は誰彼の隔てなく我執を離れて施与するという布施の徳を積ませてもらふ意味で、施与する側にも徳を積む修行となるものである。目連の母は、母の愛を布施の徳を積むことで一層深めていくべき時に「我が子だけ」という慳貪に躓いてしまった。この行いの報いによって、今や飢えと乾きに苛まれる餓鬼世界に堕ちているのであった。

目連は、衝撃を受けて泣き喚いたという。「啼泣すること幼児の如し」と經典にはある。テロにも屈しない男が、赤ん坊のように泣いたというのだ。すかさず、獲得したばかりの神通力を駆使して、餓鬼世界の母の元に食べ物や飲み物を送ったという。しかし、それらは母の口元に至るや燃えてしまったり、鋭利な刃物になって母を傷つけたという。

せっかくの彼の神通力は、餓鬼世界の母を救えないばかりか、さらに傷まで加えてしまうのである。この事実の前で、目連は挫折する。

この魂の危機に当たり目連は師のもとにゆく。

この目連の危機に対して釈尊が説く内容が、実はお盆に人が優しさを取り戻す秘密と深く関わっていると思うのだ。

目連は師である釈尊のもとにゆく。それは雨季の終わりのある日のことであった。

祇園精舎の一隅に慈愛をもって涙のわけを問う師と、神通力の挫折を引きずりながら、亡き母の安樂の教えを乞う弟子の姿があった。弟子の中でも最も優れ、既に悟りの位に達しているはずの愛弟子の憔悴しきった姿を見て、釈尊も驚いたに違いない。

そこには不屈の精神力や、神通力をまとう威厳は影もなく、赤子のように泣き腫らした目を落ち窪ませてへなへなと師の前にへたり込む、母を思う男があるばかりであった。

雨季は、修行僧が遊行の旅を留めて錫を休め、座禅と瞑想に専心する安居の季節である。この旧暦の五月半ばから七月半ばにかけての三ヶ月、祇園精舎にも多くの仏弟子たちが集まり、静かな瞑想と切磋琢磨、法の語らいの中にあっただろう。

釈尊は目連に語る。

目連よ、遠い山々が見えよう。見よ、雨を降らせた厚く重たい雲が晴れ、大いなるヒマラヤの山嶺が望めるようになってきた。やがて、雨季も去り、安居が明ける。七月十五日は、この三ヶ月の瞑想と座禅に明け暮れた安居の最後の日だ。我々出家のものは、この日に、安居の日々の懺悔をする。その時に、目連よ、七世の父母と現在の父母、あらゆる苦難にあるもののために、懺悔をした全ての修行僧に百味の食べ物、果物、清らかな水、ともし火、寝具を施して供養しなさい。全ての者に、施し、与えるのだ。その功德はきわめて広大なものであり、七世の父母はことごとく地獄・餓鬼・畜生の三途の苦しみから離れ、大いなる安らぎを得て衣食も満たされるであろう。もちろん、汝の母も安樂を得て、汝の心を覆う懊悩の厚い雲も晴れ、大いなる悟りの世界が望めるであろう。

施し、与えよ。あるいは、この一言だけであったかも知れない。この時、目連の悲泣する声は消え、彼の母もたちまちに長き間の餓鬼の苦しみを脱したという。

以上が、盂蘭盆経という短い経典の大まかなストーリーである。私の想像も加わっているが、大筋では、目連の母が餓鬼世界に墮ち、神通力では救うことが出来ず、釈尊の布施の教えを行じたら忽ちに救うことが出来た、というものだ。

以下は、末法の世界を生きる私の推測である。

目連の母は、我が子への愛の強い女性であった。が、その強さは強いが故に我執の愛となり、目連はその愛執によって生まれたものである。おそらく目連の愛も、母と同様に万人への愛として高まることなく、きわめて限定的、独善的な愛として、彼の修行、悟りへの道を妨げていたのであろう。釈尊は、弟子の目連における母性の問題を明らかにし、その克服への道を示したのであろう。それが「与えよ」なのではないか。

この物語が描く目連の母、すなわち慳貪の罪によって餓鬼世界に墮ちている母とは、目連という人間の母性の象徴であろう。目連のうちなる母性が飢餓に瀕しているのである。

と同時に目連ひとりの象徴なのではなく、いつの世の人間にとっても生きていくことに深く関わる問題となるのであろう。だからこそこの物語は読み継がれてきたのだし今もなお意味を持つのだ。

私たちは、生きていれば生命の慳貪性に流されていく。

それは、一面で、生命の生き抜こうとする意志に沿うことであるかもしれない。

しかし、人間にはその激しい慳貪性ととも、その慳貪性を超えていこうとする面も備っているであろう。それが宗教的に高まった母性なのではないだろうか。仏教はそれを菩薩性、あるいは観音性というだろうし、イエスなら「汝の敵を愛せよ」と語るだろう。

しかし、慳貪の力は目連の母を迷わせ、人間の母性を餓えさせる。宗教者である目連にとって、その母性が慳貪の闇に墮ちるのは魂の危機であっただに違いない。この目連の魂の危機に向けて、釈尊は語るのである。私たちも、私たちの母性の危機において、この物語を読むのである。

愛する弟子の生き様に鈍感であったはずのない釈尊は、目連に対して、彼の中で死に瀕する母性の再生のために道を示す。思い出してほしい。目連の母は「我が子のみ」の鉢を満たすことで餓鬼世界に落ちたのであるが、釈尊は目連に対して「全ての修行者」の鉢を満たせと言ったのである。これは「我が子への愛」という母性を、我が子を含めた「万人への愛」という母性へと、宗教的に高めていこうとする行いだったと言えるだろう。

そして目連は、慳貪性を超える一切衆生に利を施す母性に目覚めて、より深い悟りの世界へと登るのである。

この時、深い喜びに満たされた目連は「施与の行いの功德は、私だけではなく全ての人に通じるものですか」と釈尊に問う。この問いを釈尊は大いに喜び、施し与える功德は、いつの世の誰であっても、それを行えば七世の父母や六親権族を救うことになる」と語る。釈尊の教えは祖霊に対する施しを奨励することによって、母性が慳貪性に躓くことを回避する道を示しているように思える。釈尊は、目連の課題や危機が、いつの世の人間にも通じる普遍的な、永遠の問題になると洞察していたのだろう。

実際にこの盂蘭盆経の物語を知る人は少ないが、この物語の施与というテーマはお盆の習俗となって生きている。お盆になると、私たちは祖霊を迎えて祀り、果物や野菜やお菓子を供える。いつもは、食を通じて自然界の命を頂くばかりの我々が、お盆の時は、家庭では自分より先に祖霊に対して供え物をし、地域寺院では施餓鬼という伝統的な法要によって餓鬼世界に施しと与える行いをするのだ。それはまさに我執を離れた布施行の実践である。こうしたお盆のお供えの習俗は目連の物語を理論的な背景としているのである。

この何気ないお盆の習俗を通して、毎年々々、定期的に我々は目連の母性再生を追体験し、中島みゆきが唄うように「束の間人を信じ」る心を再生するのである。

今年、久しぶりに近所の盆踊りに参加した。盆踊りの起源は、一説には目連の母が餓鬼世界から仏の世界へと妙なる踊りを舞いながら昇ったという伝承に基づいているという。

その踊りの輪では各家に迎えられた祖霊の魂も共に踊るといふ。

けれども、私の故郷の盆踊りは幼かった頃より参加者が少なく、踊りの輪は輪にならずに痛ましく欠けていた。その空虚な暗がりには、あたかも餓鬼世界に通じているようでもあり、母なる故郷の餓えの苦しみのようにも見える。その欠けた輪を、今はまだ、祖霊たちが踊り繋いでくれていると思うが、これからはどうだろう。

盆が本来の盆ではなく、海外旅行の季節となりつつある今、私たちは「束の間人を信じ」ることも出来なくなり、ただひたすらに「がんばる」餓鬼性、慳貪性を生きようになってしまうのではないだろうか。

目連の危機は、抹香臭い古びたお経の中の話ではない。

今の、私たち自身の危機なのだ。

「母」は、どこにいるだろうか。

岡澤 慶澄